

代表取締役 金子恒夫よりメッセージ

謹んで地震・津波のお見舞い申し上げます

被害を受けられた皆さまに心よりお見舞い申し上げます。
くれぐれもご自愛いただき、一日も早い復旧を心よりお祈り申し上げます。



【行政の方へ】

今回は何としてでも、被災者の方々に快適な「おうち」を提供して差し上げて下さい！被災された方々へ、200万～450万円くらいの予算で、3日前後で住める**仮設住宅(ミニハウス)**を提供致します。

【個人の方へ】

仮設住宅にお困りの方がいらしたら、「ご自宅と同じ感じ」の**仮設住宅(ミニハウス)**を、被災者された方々のみ**実費**で提供させていただきます。

快適な「仮設住宅」では何故いけない！？

関東の春の日差しを受けている私たちが、朝晩底冷えのする被災地の避難場所で、プライバシーもなくお互いに気づかいしながら耐えている方々に思いを馳せると、いたたまれません。

北米では、いざ大災害が起こった直後には、連邦政府がすぐに業界に発注して、事務所の様な仮設住宅でなく、昨日までの快適な生活をサイズダウンしたトレーラーハウスを代わりに提供しています。

以前、日本の某所で災害が発生した時、キリスト教徒のカナダのトレーラーハウス会社社長が、「トミー、被災者が困っているんだったら、納車前の在庫を実費で日本に回すよ」との善意を受けました。それを某市役所に伝えたところ、「豪華過ぎる」との事で、プレハブメーカーの仮設住宅が採用されてしまいました。差額はたった5～60万だったのに、無機質な仮設住宅で、ご老人は孤独死の恐怖に耐えなければなりませんでした。

その時に私が感じたのは、「仮設住宅」はなぜ豪華に見えては、快適であってはいけないんだろう？ということでした。「被災された方々のご自宅は快適だったかも」「少しオシャレだったかも知れない」以前のご自宅と「同じ感じ」の家が、3日で用意できたら、どれだけのご老人が孤独死なくて済んだらうに、との思いでした。

この時期にこんなメッセージを発信すると、「こんな時に商売っ気出しやがって！」と、お叱りを受けるかも知れません。ただ、私たちには以前の被災者の方の「声」が頭に残っていて、一刻も早く、快適な仮設住宅(ミニハウス)を提供して差し上げたいとの思いでイッパイです。ご検討、よろしく願いいたします。